



全国鳥類繁殖分布調査

日本の鳥の今を描こう

2016 - 2019





繁殖分布調査とは

しばしば起きる大規模な災害、中山間地の過疎化や農林業の変化、そして気候変動。日本の自然は大きく変化しています。スズメの減少が話題になったように、自然の変化に伴い思いもかけない鳥が減ったり増えたりしています。そんな鳥たちの現状を明らかにし、対策を考えるために、2016年から2020年までの5年計画で鳥の国勢調査ともいえる「全国鳥類繁殖分布調査」を行なっています。

調査の体制

この調査は1970年代と90年代に環境省が行なった調査です。今回はNGOが中心となり、環境省、大学、各地の観察団体とともに、実施していきます。

キビタキ/今兼四郎

主催団体

バードリサーチ、日本野鳥の会、日本自然保護協会、日本鳥類標識協会、山階鳥類研究所、環境省生物多様性センター

共同実施団体

群馬県立自然史博物館、国立環境研究所、長野県環境保全研究所（自然環境部）、福井県自然保護センター、酪農学園大学

助成

サントリー世界愛鳥基金（2016-2018）、自然保護助成基金（2017）、セブン-イレブン記念財団（2019）

調査協力団体

日本野鳥の会秋田県支部、日本野鳥の会旭川支部、日本野鳥の会石川、日本野鳥の会茨城県、日本野鳥の会西表支部、日本野鳥の会愛媛、日本野鳥の会岡山県支部、日本野鳥の会香川県支部、日本野鳥の会鹿児島、日本野鳥の会神奈川支部、日本野鳥の会北九州、日本野鳥の会岐阜、日本野鳥の会熊本県支部、日本野鳥の会高知支部、日本野鳥の会郡山支部、

日本野鳥の会埼玉、日本野鳥の会佐賀県支部、日本野鳥の会佐渡支部、日本野鳥の会札幌支部、日本野鳥の会滋賀、日本野鳥の会静岡支部、日本野鳥の会島根県支部、日本野鳥の会滝川支部、日本野鳥の会筑豊支部、日本野鳥の会千葉県、日本野鳥の会東京、日本野鳥の会遠江、日本野鳥の会徳島県支部、日本野鳥の会栃木、日本野鳥の会鳥取県支部、日本野鳥の会苫小牧支部、日本野鳥の会富山、日本野鳥の会奈良支部、日本野鳥の会新潟県、日本野鳥の会ひょうご、日本野鳥の会弘前支部、日本野鳥の会広島県支部、日本野鳥の会福井県、日本野鳥の会福岡支部、日本野鳥の会ふくしま、日本野鳥の会富士山麓支部、日本野鳥の会三重、日本野鳥の会南富士支部、日本野鳥の会宮城県支部、日本野鳥の会宮崎県支部、日本野鳥の会山形県支部、日本野鳥の会山口県支部、日本野鳥の会和歌山県支部、油山市民の森自然観察センター、信州野鳥の会、八王子・日野カワセミ会、東三河野鳥同好会、(株)エコリス、東京環境工科専門学校、(株)地域環境計画、(公財)ホシザキグリーン財団、(株)緑生研究所

解析ワーキンググループ

赤坂宗光（東京農工大学）、姉崎智子（群馬県立自然史博物館）、上野裕介（石川県立大学）、大澤剛士（首都大学東京）、片山直樹（農業環境技術研究所）、曾我昌史（東京大学）、高川晋一（日本自然保護協会）、直江将司（森林総合研究所）、深澤圭太（国立環境研究所）、深野祐也（東京大学）、藤田剛（東京大学）、三上修（北海道教育大学）、宮下直（東京大学）、森本元（山階鳥類研究所）、山浦悠一（森林総合研究所）



みえてきた日本の鳥の状況

2062コースの調査が完了しました。全2342コースの88%の調査が完了し、地域別に見ても、どの地域も80%以上のコースの調査をすることができ、日本の鳥の状況がみえてきました。2010年の完成に向けて、残りの調査地点を調査していきたいと思えます。

身近な開けた場所の鳥が減少？

今回の調査では、336種（うち16種は外来鳥）の鳥が記録されました。今回の調査で記録された鳥と、1990年代に同じコースで記録された鳥とを比較すると、1990年代と今回の上位種は共通するものが多いですが、スズメ、ホオジロ、ツバメ、カワラヒワ、ムクドリといった、身近な開けた環境に生息している鳥が減っている一方で、シジュウカラ、キビタキ、ヤマガラといった樹林性の鳥が増えている傾向にあるようです。



全国鳥類繁殖分布調査で記録された種の個体数上位10種

1997-2002年			2016-19年		
	種名	記録羽数		種名	記録羽数
1	ヒヨドリ	29,754	1	ヒヨドリ	29,626
2	スズメ	28,189	2	ウグイス	20,388
3	ウグイス	21,644	3	スズメ	19,000
4	ツバメ	13,304	4	ハシブトガラス	10,731
5	ホオジロ	12,288	5	ホオジロ	9,928
6	ムクドリ	11,098	6	シジュウカラ	9,341
7	ハシブトガラス	10,783	7	キジバト	9,315
8	カワラヒワ	10,044	8	カワラヒワ	9,030
9	キジバト	9,383	9	ツバメ	8,439
10	メジロ	9,066	10	メジロ	7,776

分布の広がった鳥・狭まった鳥

分布が縮小した鳥の上位種にも開けた環境に生息する種が多くあげられました。特にコアジサシ、ゴイサギなど魚食性の鳥が目につきます。ビンズイとメボソムシクイは森林性の鳥ですが、標高の高いところに生息している鳥という共通点がありました。

分布が拡大している鳥は、外来鳥、大型の魚食性の鳥、森林性の鳥という共通点がありました。



全国鳥類繁殖分布調査で分布が増減した種の上位10種。数字は各年代に記録されたコース数

	1997-2002	2016-19	減少率(%)
コアジサシ	36	10	-72
アマサギ	39	18	-54
ゴイサギ	125	65	-48
オナガ	51	29	-43
ササゴイ	31	18	-42
コサギ	104	61	-41
コヨシキリ	96	57	-41
ビンズイ	128	76	-41
バン	63	39	-38
メボソムシクイ	106	69	-35

	1997-2002	2016-19	増加率(%)
ガビチョウ	13	185	1323
サンショウクイ	80	411	414
カワウ	33	163	394
ソウシチョウ	40	172	330
キバシリ	30	86	187
ヨタカ	15	39	160
ヤマゲラ	30	74	147
ミサゴ	41	97	137
ダイサギ	78	167	114
サンコウチョウ	172	363	111



森の鳥の変化

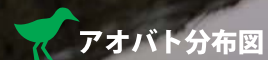
森林性の鳥の分布拡大

分布を拡大している種の上位には、サンショウクイ、サンコウチョウ、アオバト、クロジといった森の鳥たちが目立ちました。分布の拡大している外来鳥のガビチョウやソウシチョウも森林性の鳥です。また、優占種の変化を見ても、シジュウカラやキビタキなどといった樹木に依存する鳥たちが増加していました。

1970年代

1990年代

2016-2019年
(調査途中)



アオバト分布図

- 赤：繁殖を確認
- オレンジ：繁殖の可能性あり
- 青：生息を確認

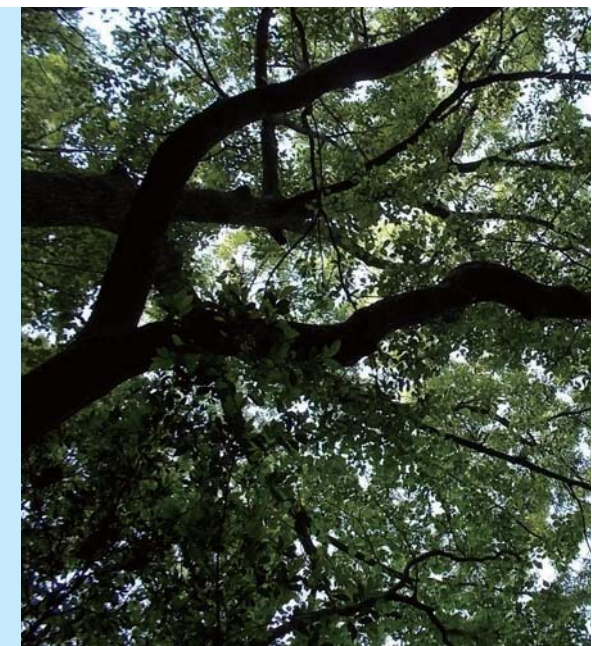
アオバト／湯浅芳彦

森の環境の変化



森林の生長？

近年は森林の伐採も減り、森の木は生長傾向にあります。また、里山や都市でも雑木林や公園、街路樹の木が育っています。そのため、日本は森の鳥にとって、良い環境になっていて、分布の拡大や個体数の増加が見られていると思われます。それとは反対に、開けた場所を好む鳥にとっては生息環境が減っていると考えられ、アカモズやチゴモズは急激し、優占種の中ではホオジロの個体数が減っているのだと思われます。



成熟してきた森林／植田睦之

藪の鳥の減少

森林の鳥が分布を広げる中、藪を利用している鳥は減少してしまいました。たとえばコマドリは分布がどんどん縮小してしまっています。また、ウグイスは低地でも見られるようになっているので、分布こそ広がっているのですが、山の生息地で以前は優占種だったのに、今は数羽しか記録できないまでに急減してしまった調査地も多くあります。



コマドリ分布図

1970年代

1990年代

2016-2019年
(調査途中)

シカの影響？

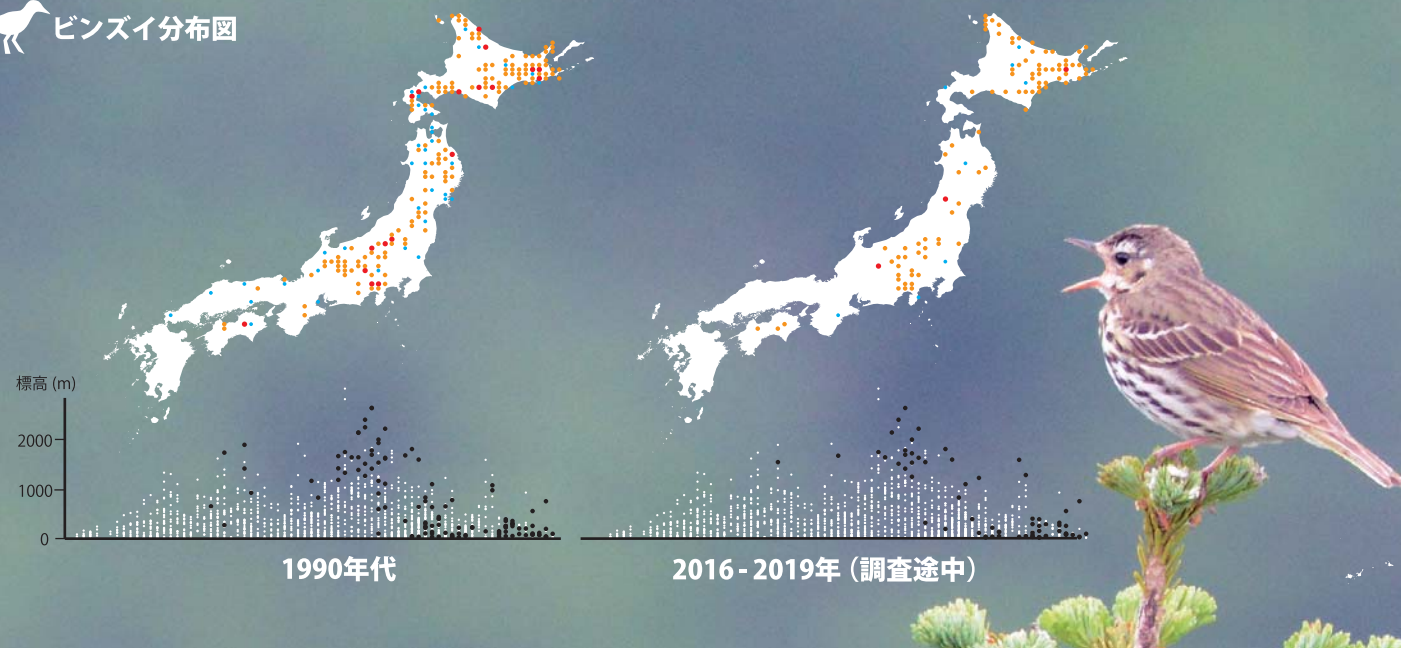
全国の森でシカが増えています。シカが高密度で生息しているところでは、シカが林床の植物を食べ、藪のない森へと環境が大きく変わってしまっています。そのため、藪を生息地としている鳥たちが減少しているのだと思われます。またこの影響は藪に生息する鳥だけでなく、彼らに托卵するカッコウ類にも及んでいるようです。ウグイスが激減した調査地ではホトトギスが、ムシクイ類が激減した調査地ではツツドリが減少していることが環境省のモニタリングサイト 1000 という調査でわかっていますし、本調査でもセンダイムシクイが分布を縮小させている九州ではツツドリの分布もまた縮小していました。



上：ニホンジカ／中林光生
下：シカに食べられ藪がなくなった森／植田睦之

コマドリ／加藤俊之

ビンズイ分布図



ビンズイ/神尾雄二

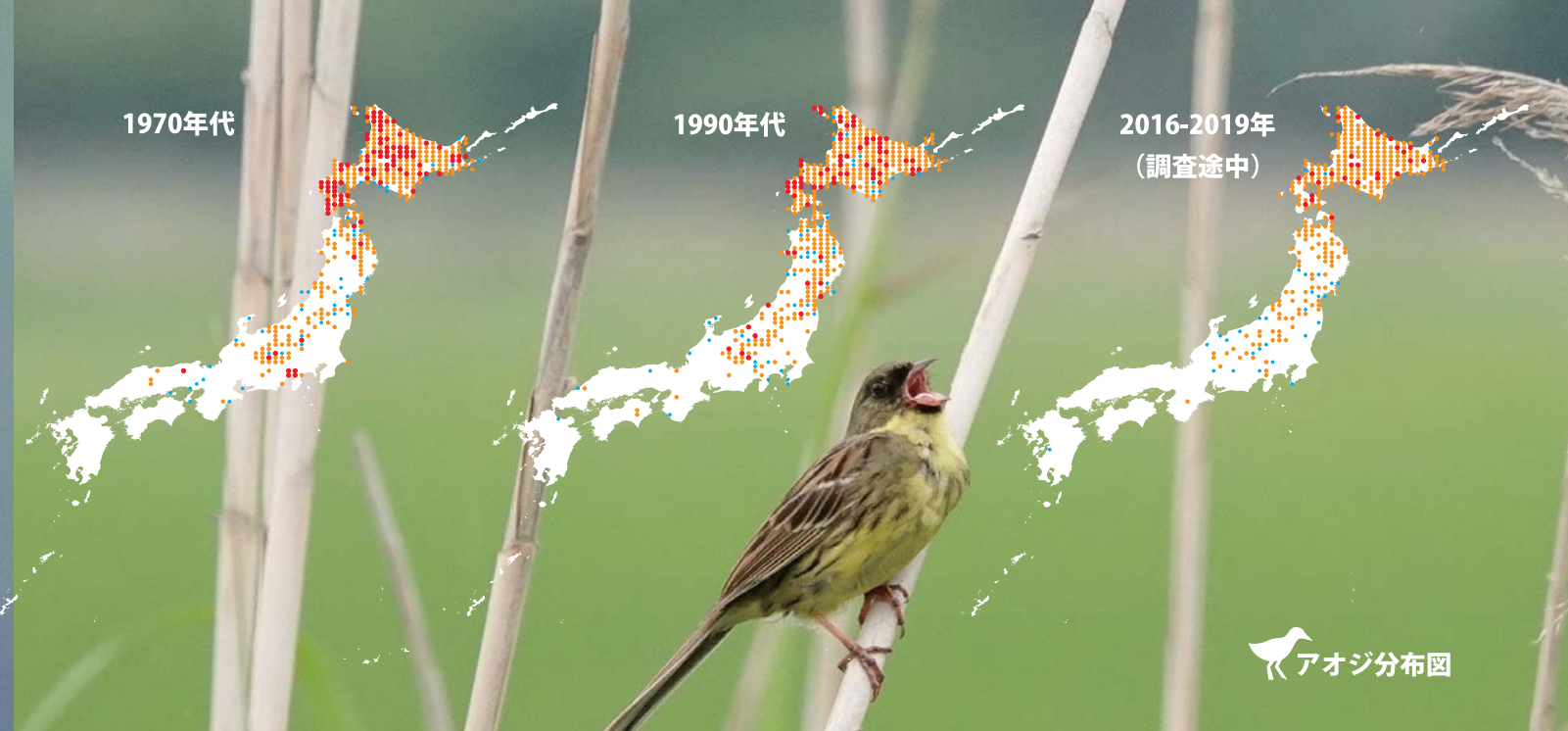
標高の高い場所の鳥の減少

藪を利用する鳥だけでなくビンズイ、メボソムシクイ、ウソといった標高の高いところに生息している鳥は分布を縮小させていました。ビンズイの分布変化を見てみると、特に南の地域では、標高の高い場所には生息し続けているものの、標高の低い場所からはなくなってしまっていることがわかります。

1970年代

1990年代

2016-2019年
(調査途中)



アオジ分布図

アオジ/佐々木均

温暖化の影響？

南の地域の低標高の場所で見られなくなったことから、鳥たちへ温暖化の影響でできていることが考えられます。アオジも分布の南端である本州の分布が南から縮小し、北端のロシアでは数が増え、分布も北上しているということで、温暖化により、分布が北へシフトしているのかもしれない。

開けた場所の鳥の変化

小型の魚食の鳥の減少

これまでの調査の結果で、もっとも減少率の高い鳥は、コアジサシ、ゴイサギ、ササゴイ、コサギなどの小型の魚食性の鳥たちでした。減少率の上位 10 種のうち 4 種を占めました。他にもヤマセミヤカイツブリといった鳥たちも減っていました。



コアジサシ/大塚之穂

開けた場所の環境の変化

小魚が減少？

小型の魚食性の鳥たちが減少していたのとは反対に、ダイサギやカワウ、ミサゴといった大型の魚食性の鳥たちは分布を拡大していました。ブラックバスなどの外来魚により小型の魚食性の鳥が食べる小魚が減っていることが減少の一因となっているのかもしれない。



ダイサギ/渡辺美郎

サシバ分布図

1970年代

1990年代

2016-2019年(調査途中)

農地の鳥の減少

森の鳥とは反対に、開けた場所の鳥は分布が縮小したり、個体数が減ったものが多くいました。特に農地に生息するアマサギやサシバの分布の縮小、スズメなどの減少が目立ちました。

サシバ/佐々木均

耕作放棄？農薬？

その原因の1つとしては、耕作放棄の影響があります。放棄により水田や畑が藪化してしまうと、農地の鳥の生息地として適さなくなってしまう場所になってしまいます。そうした場所では、サシバがいなくなっていたり、スズメやハシボソガラスなどが少なくなったりしてしまっていました。また、最近話題になっているネオニコチノイド系農薬の影響もあるのかもしれない。農地で鳥を見ていると意外に採食している鳥がいなかったりするので、食物が少なくなっているのかもしれない。

放棄されて荒地になりつつある水田/植田睦之



